

紙面から

教育随想

「学生を街のなかへ」

岡崎学園国際短期大学学長

竹市 明弘 氏

この人に聞く

中国を撮り続ける写真家

鈴木 智彦 氏

特集

岡崎再見

あじさいの里福岡を歩く

師弟同行

有我 亮介・林 幸康

フォト・ヒストリー 岡崎の教育

みどりが池(昭和三十年・五十八年)



1月号

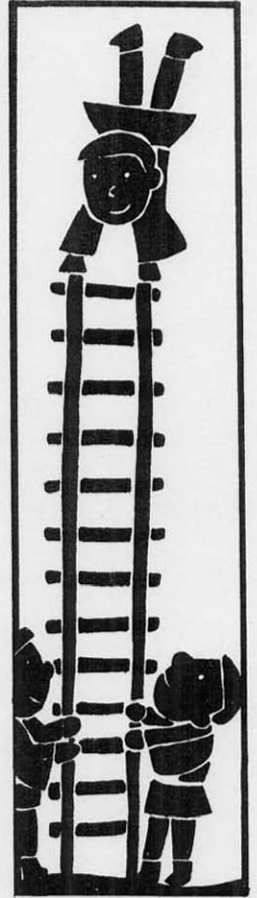
平成11年1月1日

発行／編集

岡崎市教育委員会



(曲がり是这样やって<書写の授業から> — 愛宕小)



— 教育随想 —

学生を街のなかへ

岡崎学園
国際短期大学学長

竹市 明弘

日本の大学を外観から考えると、運動場をともなった広い敷地に、柵や扉で囲われた立派な建物が目に浮かぶ。何故かその中心には時計台が聳えている。そういう大学の校地のなかは一種の治外法権が認められていて、大学紛争の頃にはそのなかでたとえ犯罪に等しい行為が行われていても、警察が立ち入ることには大変な制約があったものである。

暴力によって研究と教育の自由が侵害されていても、これを排除する権限を当局は振おうとしなかった。何故なら警察の介入を要請することは、学問の自由と大学の自治を侵すからであると言う。全く妙な話である。これがつい三十年前の事であり、そういう大学の自治を象徴する言葉が「象牙の塔」であった。

暴力に支配された日本の大学の無秩序を打ち破るいかなる権力もその頃の私たちにはなかったので、「日本の大学の建築計画が悪いからこんなことになるのだ。建物をひとまとめにして柵で囲っているから、封鎖され占拠されてしまえばそこへだれも入れなくなる。むしろ街のなかの一般の民家や事務所にまじって教室や研究所をつくっておけば、封鎖も占拠もしようがないではないか」と言ったものである。

しかし、最近設立される大学を見てみると、相変わらず郊外の広大な敷地に大学だけの建物をつくっている。学問の純粹培養の発想であるが、これではまた占拠でもされたらひとたまりもないであろう。

しかし、これにはもつといけないことがある。大学の教育研究は、学者と学生との間の純粹な知的営為としてのみ実践されるのではなく、むしろ歴史と伝統文化の薫りに包まれて育ち、実際の経済活動や市民の社会生活に触れるなかで刺激を受けるのでなければ、次第に生気を失って殻だけの空中楼阁を築くことになるであろう。大学はむしろ街のなかにこそ設置されるべきである。

幸い岡崎は歴史遺産に富んでいる。今のように各種の施設が方々に散るのでなく、歴史や文化を楽しみながらフアッションやレストランで生き生きと青春を謳歌する学生たちを、街なかに見たいものである。

(たけいち あきひろ)



羅針盤

転校の日に

常磐小学校長

大山 一 男

一年生担任日先生の学級のS子が、校長室へ詩の暗唱にきました。「校長先生、詩の暗唱にきました。」おさるがふねをかきましたを朗読します。聞いてください。」

S子は元気な声で、表情豊かに詩の音読・朗読ができる子です。詩の暗唱カードには合格印がたくさん押してあります。十回合格賞ももらえました。彼女は転校が決まっても、毎日詩の暗唱に校長室にきます。

S子が転校する日が来ました。お昼の掃除の時間に、私は溝の落ち葉を取っていました。S子が友達と側に来て、

「手伝ってあげようかあ。」
というのです。

「おつ、有り難い。じゃあ、ほうき取って、掃いて。」

「うん。」

ふるさとシリーズ

この人に聞く



中国を撮り続ける写真家

鈴木 智彦 氏

シルクロードに憧れて、毎年夏になると中国を訪れ、十五年もの間、中国の素晴らしさを撮り続けた写真家、鈴木智彦さんのお宅を訪問した。まず、中国に行くようになったきっかけからお尋ねした。

「一九八四年に、画家の鈴木坂治さんと旅行したのが始まりですね。シルクロードに行こうということになって、敦煌に行ったんです。十五年も前ですと、敦煌あたりですね。今みたいに開けてないんです。それで、奥地に入ると、自分の小学生のころにタイムスリップ

した感じがしたんですよ。」
と、当時のことを言葉を探しながら語られた。

続いて、写真を撮影している時の様子をお尋ねした。

「子供を写す時なんか、ほくの方が先にちよっかいを出すんですよ。まるで昔の自分がそこにいるように、懐かしい気持ちになるんですね。向こうもだんだんと真剣になってきて、その自然な表情がいいですね。」

と、童心に返ったような表情で話が途切れなかった。

鈴木さんは、「素晴らしき中国」という写真集を二冊出版されておられる。その中の作品はどれも、人物の自然な姿とその感情が一体となつて一つの焦点に凝縮され、見れば見るほど味わいのあるものばかりである。

何万枚もの写実的な、温かい作品を創作してこられた結果、一九九七年七月に、鈴木さんの作品が初めて東京、銀座のコダックフォトサロンで展示されることになり、写真業界や文化界などのさまざまな分野で注目され好評を得たのである。

さらに、九月には、中国で最も格式の高いといわれる北京の中国美術

館で写真展が開催された。展示中には、数千人の人が訪れ、賞賛する声絶えなかったそうである。また、一九九八年八月には、ウルムチでも写真展が開かれ、北京会場以上の盛況だったという。

「中国での写真展の話があった時は逃げたい気持ちもあったんですけど、せつかくのチャンスを作ってもらったんだから、がんばろうと思っただけですよ。」

現在の一番の楽しみも夏の中国旅行だそうである。今なお、中国の魅力を追いつける鈴木さんに、写真一筋に生きる人間の迫力を感じた。

氏名 鈴木 智彦
生年月日 昭和十四年十月十一日
住所 栄町三丁目六十七番地



といって、彼女は掃いたりバケツを運んだりして手伝ってくれたのです。「本当に助かったよ。有り難う。」という、二人はにっこり笑いしました。S子は黙って校門付近のきれいな葉っぱや小石を拾ってポケットに入れ、駆けて行きました。

五時間目は、S子のお別れ会です。自分たちで収穫したいもで「おいもパーティー」になりました。子供たちで「かざりを作る」「ペンダントをあげる」「折り紙を作る」「おいも料理を作る」「お別れの言葉をいう」「お手紙をあげる」などのアイデアを出し合い、楽しいパーティーになりました。なかでも、お母さん方もいも料理を作ってくれて、ふかしもち、きんとん、てんぷら、いもパイ、大学いも、スイートポテトフライと担任手製の鬼まんじゅうが並んで、みんな大はしゃぎだったのです。S子にとって最高のお別れパーティーになりました。

その後で、S子は畑の地主さんからももらったものつるや野菜をもつてウサギにお別れの世話もして来たのです。

S子の転校の日は、サツマイモが温かい人の心の輪をさらに大きくしてくれたように思います。

岡崎再見

あじさいの里福岡を歩く



▲樹齢300年以上といわれる福岡小の「土呂陣屋の松」①

◀今ではすっかり跡形もない旧市電終着点②

あたりを見下ろすように、ひととき威風堂々、かつ均整のとれた樹姿。福岡小学校校庭の北側に位置する五本のクロマツ。樹齢は三百年以上と言われ、歴史ある福岡町を象徴する存在となっている。

福岡の町は、その昔西三河地方で最も開かれた地の一つであった。室町時代に、蓮如上人がこの地を訪れ、布教の根源地として本宗寺を建てたと言う。三河一向宗の中心地として繁栄した時期もあった。江戸時代には額田郡土呂村と呼ばれ、一名を「都路」とも書いた。この名は、都へのあこがれか、それとも自らを三河の都としたものだったのだろうか。いずれにしても、西三河を代表する町であった。

福岡を歩いてみると、歴史をしのばせる物が数多く見られる。蓮如上人が京都の乱を避け、この地で布教を行ったという。御堂山には、上人の分骨塚も残されている。平安時代に作られた土呂の大仏が奉られている土呂八幡宮。その西北の森の中には忘れ去られたかのように西念塚がある。大仏の修理に尽力したが寄付が募らず、金粉のかわりに胡粉をぬったため、非難を受け熱病で死んだ僧西念。人々は哀れに思っただけで葬ったのだと言う。その他にも、三河の一向一揆で討ち死にし、その亡がらを埋めた海月佐五介塚。この地で無念の死を遂げた虚無僧を弔ったとされる墓などもある。

町のとある交差点。そこには現代的なあじさいの里を象徴するモニュメントがある。その近くの砂川のほとりに、ひっそりと昔ながらの市が立つ。三と八のつく日に開かれる土呂の市、三八の市である。昔は藤川宿から吉良へ向かう吉良道に店が立ち並びにぎわったと聞く。町に残された東市仲、西市仲といった地名が、当時のにぎわいを今に伝えている。

夕暮れになって、町に点在する常夜燈に明かりがたった。温かい光が心を和ませる。いにしえの人々もそうだったのだろう。この町は、まだ歴史とともに生きていくようである。



▲わずかに残るうだつのある家⑤



▲福岡の町を照らす常夜燈④



▲昔の面影を漂わせる町並③



▲今に残る三八の市⑧



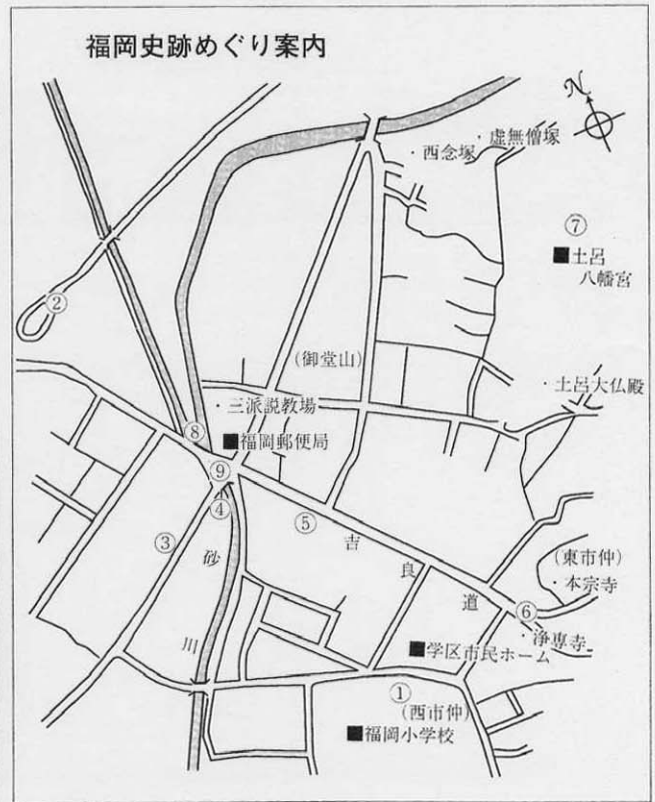
▲竹林にたたずむ海月佐五介塚⑦



▲蓮如上人のお祭りパレード⑥



▲象徴的なモニュメント⑨





クラスの宝もの

矢作北小学校

加藤 真志

小さいはずが起きた。I子とK子の靴が入れ替わっている。数日様子を見たが、被害はこの二人だけ。学級挙げての取り組みと共に、私も毎放課げた箱に向かった。おかしい。だれも靴を入れ替えることなどできないはずなのに…。

ここで浮かび上がるのはI子本人。いつも最初に見付けるのは彼女だった。

一人っ子でわがままに育ったI子。自分の考えをはっきり述べることができ、集団でも大きな存在。しかし、反面、周囲に受け入れられないこともあり、友達も幾人かわわつた。いつもは何事もそつなくこなす立派な子。しかし一方では心に小さな影を落として

いたのだ。いったい私は何を
見ていたのだろう。自責の念
が込み上げる。

「花の水を替えてくれたのは
君だね。ありがとう。」

冗談交りの会話の後にもう
一言。すると彼女からも、

「先生、今日はね、こんなこ
とがあったよ。」

徐々に彼女からの言葉も増
え、そこに友達の輪もできた。
そして、いたずらはやんだ。

初めての小学校勤務に戸惑
う毎日。どの子どもどの子も
日々のできごとの中で、いま
さに育っている。だれもが持つ
ている心のひだに触れるた
び、小学校教師として育てら
れているのは自分自身と痛感
する。どの子どもみんな、素晴
らしいクラスの宝ものだ。



師弟同行

厳しく温かく

矢作北中学校

林 幸康

「時間があつたら、一度顔を
出しに来ないか。」

転任校での研究会が終わっ
た次の日、有我校長先生から
電話をいただきました。さつ
そく伺うと、研究会での苦勞
に対するねぎらいでした。こ
のとき、改めて、かつての文
句ばかりが先に立つ自分の言
動を思い出し、先生の心の温
かさと大きさを実感しました。

先生と共に過ごした広幡小
での三年間は、いい気になっ
ていた私が、初心へと導かれ
たときであったように思いま
す。新任の時のような緊張感
もなくなり、自分の力を過信
していた時期、

「林君、寝とるんじゃないの
か。」



職員会でうとうとしていた

私に一喝。ことあるたびに、
授業や学級経営についてはも
ちろん、部活動の運営、夏休
みに読むべき教育図書を紹介
など、教師としてあるべき姿
を一つ一つ示してくださいま
した。その上に、広幡小を去っ
た後まで見守っていてくださ
いました。

私の息子に、先生の名前の
一文字を使わせていただきま
した。親子共ども、先生のよ
うに厳しく、温かい人間にな
れるよう精進していきます。

守ったら後退する

前広幡小学校長

有我 亮介

林君、新任から四年以内の
職員を校長室に集めたときの
ことを覚えていますか。Tさ
んは「そういうことを言われ
るとおこれます」と訴えてき

ました。林君も同じ気持ちだっ
たでしょう。

教職経験の長短にかかわら
ずだれしも、今の自分を守ろ
うとします。しかし、守りの
姿勢に入ったら、もう後退の
始まりです。

林君のことについて言うな
らば、君の言動は、かつての
私自身を見ているようでした。
「自分の力を過信していた」
ところなども私にそっくりで
した。

また、そのころの広幡は、
二十六才以下の独身の先生が
学級担任の三分の一強を占
め、活気がありました。が、
その中に既に停滞のきざしを
私は感じていました。

そのようなわけで、君が書
いているようなことをいくつ
か要求してきました。それら
に対して、職員が立ち向かっ
てくることをひしと感じてい
ました。君も引き下がらなかつ
た。特に授業については粘っ
こくやりましたね。

広幡後の君の活躍を頼もし
く、うれしく思っています。
いつも応援しています。



お知らせ

流したり小 河川美化活動を
展開したりしている。

◆岡崎市手作り絵本の会「金
のりんご」

手作り絵本講座の開催や
盲学校へ点字手作り絵本を
贈るなどボランティア活動
への取り組みを広げている。

◆平成十年度青少年を励ます
メッセージ

佳作 福岡中 石川春次先生
佳作 羽根小 野勢裕子先生

◆第四十三回ソニー教育資金
贈呈校

最優秀校 連尺小学校
優秀校 大樹寺小学校

優秀校 常磐中学校
◆第十四回時事通信社「教育
奨励賞」

努力賞 城北中学校
◆平成十年度大幸財団教育助成

◆第二十二回愛知県野生生物
保護実績大会

県知事賞 生平小学校
◆第三十三回全国野生生物
保護実績発表会

日本鳥類保護連盟会長褒賞
生平小学校

◆河合中学校理科部

三十一年間にわたり学区
の河川にホタルの幼虫を放

◆第四十六回統計グラフ全国
コンクール

入選 竜海中 一年 見並 良治
城北中 一年 深津菜美子

◆平成十年度全国自作視聴覚
教材コンクール

小学校(幼稚園含む)部門
優秀賞「おならのへいさん」

市立幼稚園現職教育部
入選「三河の林業」

AVL・自作教材制作委員会
社会教育部

入選「ヒメハルゼミ」
山中八幡宮の生きた化石」

◆第四十八回全国小中学校
作文コンクール

優秀賞 緑丘小 一年 江本 卓司
緑丘小 五年 山口裕美子

葵 中 三年 高橋 佳奈
◆平成十年度健康フェア

(市長賞のみ)
習字の部

附属小 六年 岡田 真依
◆描画の部

ポスターの部
友里

甲山中 三年 平野 聖実

◆第十五回伝統的工芸品作文
コンクール

全国都道府県教育委員会連合会
会長賞 甲山中 一年 山中 弘子

◆第二十三回「原子力の日」
記念中学生作文

最優秀賞 福岡中 二年 鈴木 信明
◆平成十年度県エイズ予防

強化週間ポスター
三席 甲山中三年 山田素子

◆第三十八回西三河英語スピーチ
コンテスト

入賞 スピーチの部
新香山中 三年 増山 健

美川中 三年 酒井サイモン
◆第四十八回西三河長距離

継走大会 男子
竜南中学校

優勝 二位 東海中学校
三位 城北中学校

女子 六ツ美中学校
◆第十五回実践体験文発表会

県教委賞 矢作西小 六年 初山友里奈

中部善意銀行賞
柴田 佳子

常磐中 三年

◆平成十年度岡崎市健康優良
児童生徒

竜海中 三年 山本 淳子
はじめ一二四名

◆平成十年度岡崎市よい歯の
児童生徒

竜美丘小 六年 山田 隆之
はじめ一二四名

◆第三十七回かんぽ作文コン
クール

東海郵政局長賞
羽根小 六年 小栗 佐織



▶第二十六回教育文化賞授賞式
(十一月二十一日・せきれいホール)



フォト・ヒストリー 岡崎の教育

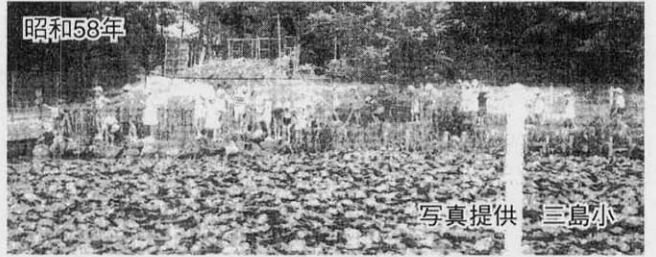
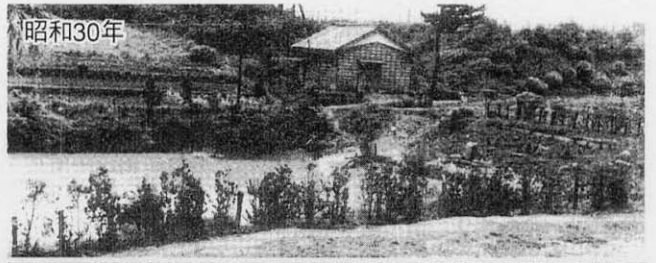
みどりが池

(昭和30年・58年)

・表紙写真
・カット
愛宕小 酒井芳宏
矢作南小 篠田好香

昭和三十年十二月、現在地に本校が移転された時から、学校敷地内の北東部に「みどりが池」がある。もともとは田畑の灌漑用の溜め池であった。

その後、この池にアヒル、コイ、フナなどを放し、周辺部にも植樹をした。冬には野鴨なども飛来し、池を泳ぐ姿も見られる。「緑に学び緑を育て緑と生きる」のもと、みどりが池及びその周辺は、立派な自然観察園と生まれ変わり、理科・生活科の楽しい生きた学習活動の場となっている。



写真提供 三島水



- *天国までの百マイル 浅田 次郎 ￥1500
朝日新聞社
- *他力 五木 寛之 ￥1500
講談社
- *ああ言えばこう食う 檀 ふみ・阿川佐和子 ￥1500
集英社
- *社会的ひきこもり 斎藤 環 ￥690
PHP新書

- *だれが山を守るのか 河津 千代 ￥1500
リプリオ出版

水や空気、農産物から海産物まで、私たちは森林の恩恵を受けている。しかし、国土の3分の2を占める日本の森林は荒れ、林業がピンチに立たされている。

光合成によって地球環境を守るのは植物である。自然林と人工林の特性と役割を分析し、植林・下刈り・枝打ち・間伐などの実体験を通じての指摘だけに説得力がある。

子供向けに書かれたものだが、「森林入門書」として大人にも薦めたい良書である。

訪れた新しい朝。昨日と変わらぬ同じ朝であるが、新しい年の光は、やはり、ひととき輝いている。今、その光の中でいくつもの期待と夢が膨らみ、そして、はじけ、あふれ出そうとしている。

一九九九年、二十一世紀は、もう、そこに迫っている。

シ
オ
ス
ア

朝日をあびて野鴨が泳ぐ。みどりが池に冬の到来だ。寒さ知らずの子供たちが元気に息を弾ませやってくる。この池は、自然の宝庫。池にすむ生き物や周りの樹木は、子供にとって魅力的な遊び相手。四十年以上、みどりが池は子供たちを見守り続けているのである。

新疆の人たちの温かいぬくもりや、子供たちの素直で無邪気な様子が鈴木さんのどの作品からも伝わってくる。この写真集を手にとると、ほのぼのとした気分になれるのは、私ばかりではないであろう。子供時代に戻ったような懐かしい気持ちだ。

すっかり日も落ちようとするなか、福岡の町をじっくり歩いてみると、「虚無僧」の末裔に当たる人物が、今でもこの国に生きていることを地域のご老人から伺えた。深編笠をかぶり、尺八を吹き、住民の家々に訪れる、そんな姿が今でもひそかに見られるのだという。